

## 古墳時代前半期における小型古墳の性格 -小土坑をともなう埋葬施設の検討-

著者	滝沢 誠
雑誌名	筑波大学先史学・考古学研究
号	25
ページ	1-22
発行年	2014-03
その他のタイトル	The Nature of Small Tumuli in the First Half of the Kofun Period: Considerations on the Graves with a Small Pit under a Coffin
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00149865">http://hdl.handle.net/2241/00149865</a>

論文

## 古墳時代前半期における小型古墳の性格 —小土坑をともなう埋葬施設の検討—

滝 沢 誠

古墳時代前期から中期にかけて、棺床部に小土坑をともなう特異な埋葬施設の存在が知られている。その祖型は古墳時代前期の排水用土坑に求められ、前期末から中期前葉には中央部配置をとる基本タイプが成立して、各地の古墳に採用されたものと考えられる。その分布は近畿以東に偏在する傾向を示し、それらを採用した古墳はほぼ小型古墳に限られている。この特異な埋葬施設は近畿地方で成立したものとみられ、そのひろがりが見出す小型古墳被葬者間の交流にはヤマト王権が関与

していたものと思われる。また、この埋葬施設を採用した小型古墳の存在形態を確認すると、周辺に同時期の大型古墳が認められないケースが多い。これらの点を考えあわせると、この特異な埋葬施設がひろがりをみせた背景には、各地の小型古墳被葬者と直接の関係を結びあわせるヤマト王権側の動きがあったものと推察される。それは、早くも古墳時代前期末から中期前葉に、一部地域の小型古墳被葬者がヤマト王権による支配秩序に組み込まれていたことを示すものであろう。

### I. はじめに

古墳時代の政治秩序をめぐる従来の議論の中で、古墳時代の前半期（前期～中期前半）においては、各地の大型古墳に葬られた地域首長と近畿地方の政治勢力との間に直接の政治的関係を認め、小型古墳<sup>1)</sup>の被葬者はなお地域首長の在支配に組み込まれているとする見方が少なくない。

しかし、古墳時代前半期における小型古墳の諸要素をみなおすと、そこには地域を越えた特徴的な墳墓要素の存在が認められる。しかもそうした墳墓要素は、近隣の大型古墳や在来の伝統的な墳墓を媒介として理解するものではなく、それらが成立した背景には地域を越えた小型古墳被葬者どうしの広域的な交流を指摘しうる可能性がある。本稿では、そうした墳墓要素の一つとして埋葬施設の棺床部に設けられた特異な小土坑を検討し、従来とはやや異なる視点から古墳時代前半期における小型古墳の性格を考えてみることにしたい。

### II. 棺床の小土坑をめぐる議論

古墳時代前期から中期にかけては、中小規模の古墳を中心に木棺直葬の埋葬施設がひろく採用されている。それらの中に、ごく少数ではあるが、棺床の中央部や端部に小土坑を設けたものが知られている。古くは、1950～60年代に調査された大阪府珠金塚古墳、岐阜県竜門寺15号墳での確認例があり、両古墳とも小土坑の内部に礫が充填されていたことから、調査者らはその機能を排水用、あるいは排湿用と想定した（橋崎1965：141頁、末永編1991：107頁）。

また、同じころ竪穴式石室の基底部構造を検討した北野耕平は、大阪府駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土榎で検出された方形の排水施設と珠金塚古墳南榎で検出された礫詰めの小土坑を対比し、前者から後者への変化を竪穴式石室における基底部構造の消滅過程として理解した（北野1964b：194頁）。

その後1980年代になると、朴美子が奈良県北原古墳の調査報告に際して小土坑をともなう埋葬施設を集成し、小土坑の構造や機能、系譜について詳細な検討をおこなった（朴1986）。朴は、朝鮮半島の事例を含む16古墳18例を取り上げて多角的な分析を加え、当該埋葬施設を採用した被葬者の階層的 성격にも言及した。この研究は、小土坑をともなう埋葬施設について論じた先駆的な研究として重要な内容を含むものであり、本稿での議論もその成果に拠るところが大きい。しかし、当時すでに知られていた静岡県下の多くの事例（若王子古墳群、釣瓶落古墳群）が検討対象とされていない点には、資料上の不備があるといわざるをえない。また、特異な小土坑をともなう埋葬施設が列島内の広範囲に分布するにいたった背景についての言及を欠いている点は、その歴史的評価に向けての課題を残したものといえよう。

この朴による研究以降、小土坑をともなう埋葬施設を正面から取り上げた研究はみあたらない。ただし、静岡県中部の志太平野には数多くの事例が存在することから、村田淳は駿河・遠江における古式群集墳の展開について論じる中で、その特徴的なあり方に言及している（村田2002：56頁）。同じころ筆者も、志太平野における前・中期小型墳の変遷を段階的に整理し、画期となる第3段階（古墳時代前期末～中期前葉）には、割竹形木棺や土器副葬とならんで集水坑（小土坑）が出現すること、また、それらの墳墓要素は密接に関連するかたちで外部地域からもたらされたものであることを指摘した。さらに、同時期の志太平野には前方後円墳などの顕著な大型古墳が認められないことから、それらの墳墓要素を受容するにいたった契機は、小型古墳被葬者間の広域のかつ直接的な交流に求められるのではないかと推論した（滝沢2003）。

本稿では、以上に述べた先行研究の成果と課題をふまえつつ、あらためて小土坑をともなう竪穴系埋葬施設の基本的な整理をおこなう。そのうえで、当該埋葬施設が採用された背景を検討し、古墳時代前半期における小型古墳の性格について若干の考察を試みることにしたい。

なお、ここで取り上げる小土坑については、これまで「排水坑」（朴1986）や「排水土坑」（村田2002）、「集水坑」（滝沢2003）などの名称が与えられてきたが、本稿では現象面の整理を進める立場から、ひとまず「小土坑」の用語を使用することにしたい。

### Ⅲ. 小土坑の検討

#### 1. 分類

棺床に小土坑をともなう竪穴系埋葬施設の事例は、管見による限り、古墳数で27例、埋葬施設数で32例を確認することができる（第1表、第1・2図）。なお、ここでは棺床の範囲内に掘り込まれた小土坑を集成の対象としており、竪穴式石室や粘土榎の基底部に設けられた土

古墳時代前半期における小型古墳の性格

第1表 小土坑をともなう埋葬施設

No.	所在地	古墳・埋葬施設名	墳 丘		棺		小 土 坑			埋葬 遺体	時期	
			形態	規模 (m)	形 態	規模 (m)	形態	構造	配置			規模 (cm)
1	神奈川	吾妻坂古墳第3号主体部	円	約50	木	(5) × 1.7	円	●	中央	70 × 60/24		II
2	神奈川	吾妻坂古墳第1号土壇			木?	不明	円	●	不明	45 × 36		
3	静岡	若王子2号墳2号棺	方	14 × 14	割木	5.35 × 0.85	円	●	中央			I
4	静岡	若王子7号墳	円	14	割木	5.5 × 0.75	(円)	●	中央		(2)	III
5	静岡	若王子24号墳	円	12	割木	2.8 × 0.4		●	中央			III
6	静岡	釣瓶落1号墳	(舟)	13 × 5	割木	4.6 × 0.7	円	○	中央			I
7	静岡	釣瓶落3号墳3号棺	(舟)	9 × 6	木	4.8 × 0.55	円	○	中央			II
8	静岡	釣瓶落14号墳1号棺	不整方	10 × 8	割木	4.7 × 0.65	方	●	中央			I
9	静岡	釣瓶落14号墳2号棺			割木	(2.2) × 0.5		○	(中央)			
10	静岡	東浦1号墳1号棺	方	9 × 7	割木	5.08 × 0.5	円	○	中央	65 × 50		II
11	静岡	東浦2号墳1号棺	方	14.5 × 8.5	割木	4.9 × 0.7	長楕円	●	中央	90 × 40/15	(2)	II
12	静岡	東浦2号墳2号棺			割木	4.85 × 0.65	円	●	中央	40 × 40		
13	静岡	東浦3号墳1号棺	方	12.8 × 10.3	割木	6.70 × 0.65	長楕円	●	中央	130 × 45		II
14	静岡	仮宿沢渡1号墳SFO1	不整円	13.3 × 12.6	割木	5.67 × 0.65	長楕円	●	中央	80 × 45/18	(2)	II
15	静岡	文殊堂8号墳第1埋葬施設	円	20	割木	5.5 × 0.6	長楕円	●	端	160 × 60/20	(2)	III
16	静岡	文殊堂8号墳第2埋葬施設			割木	4.5 × 0.5	長楕円	●	中央	120 × 40/10		
17	静岡	林2号墳第2埋葬施設	円	16	割木	3.9 × 0.6	長楕円	●	端	150 × 50/10		IV
18	愛知	三ツ山2号墳第1主体部	方	18	割木	6.2 × 0.7	円	○	中央	37 × 21/18		I
19	愛知	三ツ山2号墳第2主体部			割木	3.78 × 0.63	円	○	端	45 × 15/10		
20	岐阜	竜門寺15号墳	円	18	割木	5.56 × 0.7	円	●	中央	45 × 45/30		II
21	福井	大渡城山古墳埋葬施設1	方	20 × 20.3	割木	5.83 × 0.74	楕円	●	中央	71 × 43/15		II?
22	三重	草山遺跡SX182	方	10.1 × 10.0	木	3.53 × 0.81	円	○	端	32 × 22/10	(1)	II - IV
23	三重	河田C-21号墳	方	10	(割木)	4.1 × 0.7	楕円	○	端	90 × 60/20		V?
24	三重	久米山6号墳	円	12 ~ 17	木		方	●	端	40 × 40/22		II - III
25	奈良	丹切6号墳	円	12	箱石	1.85 × 0.42	小円	●○	両端	20 × 20/10	1	IV
26	奈良	北原古墳北棺	方	16 × 14.5	割木	5.3 × 0.8	方	○	中央	40 × 40/20	(2)	II
27	奈良	池殿奥5号墳東堀木棺	方円	22.5	箱木	1.78 × 0.57	楕円	○	端	65 × 33	(1)	IV
28	奈良	萬蒲谷2号墳	方	11 × 9	割木	1.85 × 0.4	円	○	端	30 × 30/15	(1)	II
29	大阪	珠金塚古墳南部	方	27	割木	5.0 × 0.55	方	●	中央	100 × 100/70	(2)	III
30	広島	池の内遺跡第6号主体	-	-	割木	3.0 × 0.9	小円	○	中央	16 × 11/19		IV?
31	福岡	神領2号墳第2主体部	円	26	割木	5.20 × 0.56	円	●	中央	36 × 34/20	(2)	II
32	福岡	池の上D-2号墓	-	-	[土壇]	2.37 × 0.42	縦方	○	中央	60 × 37/8		II

\*墳丘形態：円＝円墳、方＝方墳、舟＝舟形墳、方円＝前方後円墳

\*棺の形態：割木＝割竹形木棺、箱木＝箱形木棺、箱石＝箱形石棺、木＝木棺（形態不詳）

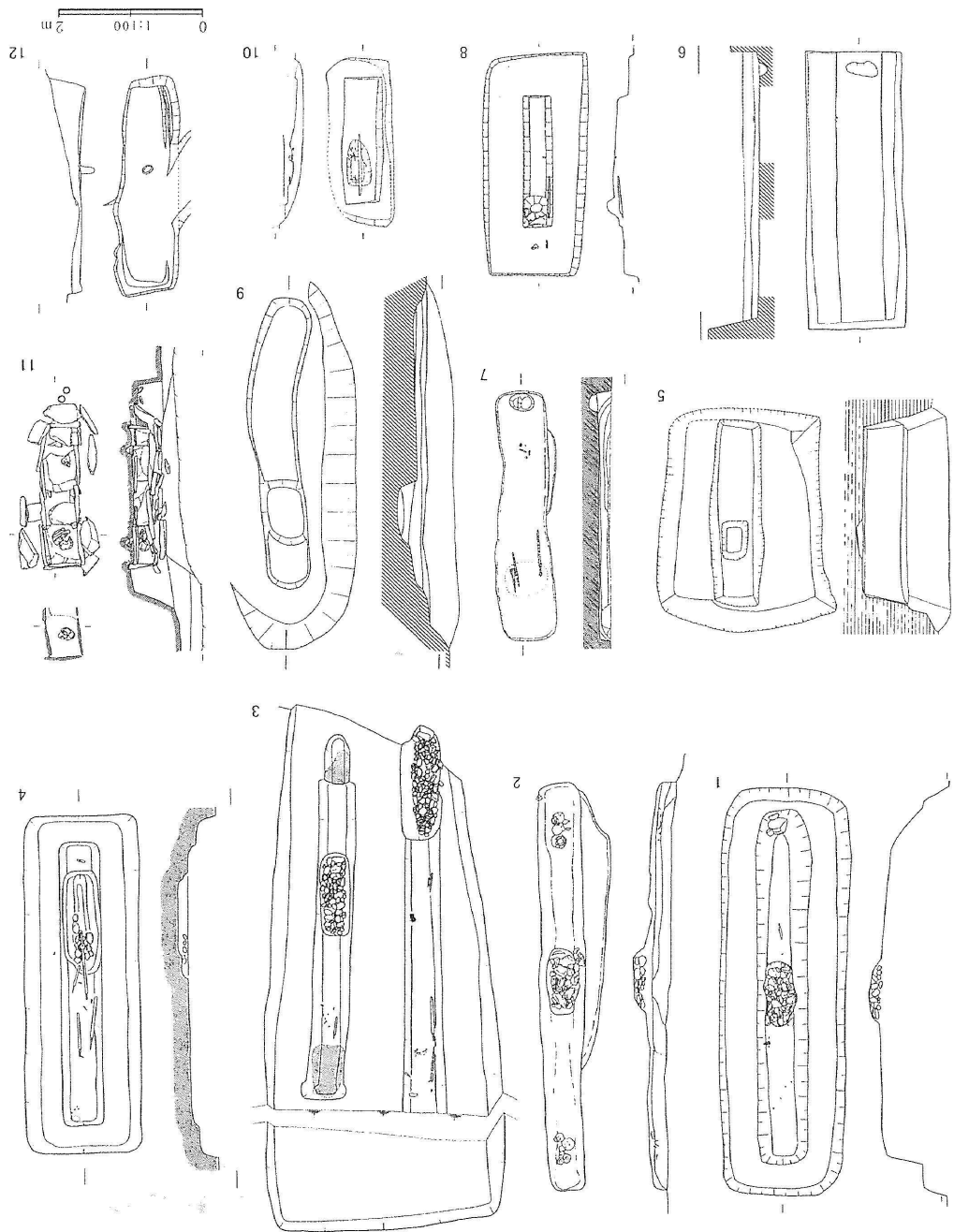
\*棺の規模は、長さ×幅を示す。

\*小土坑の構造：●＝礎詰め、○＝素掘り

\*小土坑の規模は、最大長×最大幅/深さを示す。

\*埋葬遺体：括弧内は副葬品の配置等から推定される埋葬遺体数を示す。

\*時期：I＝前期末～中期初頭 II＝中期前葉、III＝中期中葉、IV＝中期後葉、V＝後期。



第2図 棺床に小土坑をともなう埋葬施設(2)

1: 静岡・東浦2号墳1号棺(Da1) 2: 静岡・板宿沢渡1号墳SF01(Da1) 3: 静岡・文殊堂8号墳第1埋葬施設(左: Da2)・第2埋葬施設(右: Da1) 4: 静岡・林2号墳第2埋葬施設(Da2) 5: 福岡・池の上D-2号墓(AB1) 6: 愛知県三ツ山2号墳第2主体部(Bb2) 7: 三重・草山遺跡SX182(Bb2) 8: 奈良・高瀬谷2号墳(Bb2) 9: 三重・河田C-21号墳(Cb2) 10: 奈良・池崎奥5号墳東側木棺(Cb2) 11: 奈良・丹羽6号墳(Ea2・Eb2) 12: 広島・池の内遺跡第6主体(Eb1)

第2表 小土坑の分類

分類		中央部 (1)	端部 (2)
方形 (A)	磔詰め (a)	静岡：釣瓶落 14 号墳 1 号棺 [ I ] 大阪：珠金塚古墳南塚 [ III ]	三重：久米山 6 号墳 [ II - III ]
	素掘り (b)	奈良：北原古墳北棺 [ III ] 福岡：池の上 D-2 号墓 [ II ]	
円形 (B)	磔詰め (a)	神奈川：喜妻坂古墳第 3 号主体部 [ II ] 静岡：若王子 2 号墳 2 号棺 [ I ] (静岡：若王子 7 号墳 [ III ]) 静岡：東浦 2 号墳 2 号棺 [ II ] 岐阜：竜門寺 15 号墳 [ II ] 福岡：神領 2 号墳第 2 主体部 [ II ]	
	素掘り (b)	静岡：釣瓶落 1 号墳 [ I ] 静岡：釣瓶落 3 号墳 3 号棺 [ II ] 静岡：東浦 1 号墳 1 号棺 [ II ] 愛知：三ツ山 2 号墳第 1 主体部 [ I ]	愛知：三ツ山 2 号墳第 2 主体部 [ I ] 三重：草山遺跡 SX182 [ II - IV ] 奈良：萬籬谷 2 号墳 [ II ]
楕円形 (C)	磔詰め (a)	福井：大渡城山古墳埋葬施設 1 [ II ? ]	
	素掘り (b)		三重：河田 C-21 号墳 [ V ? ] 奈良：池殿奥 5 号墳東側木棺 [ IV ]
長楕円形 (D)	磔詰め (a)	静岡：東浦 2 号墳 1 号棺 [ II ] 静岡：東浦 3 号墳 1 号棺 [ II ] 静岡：仮宿沢渡 1 号墳 SF01 [ II ] 静岡：文殊堂 8 号墳第 2 埋葬施設 [ III ]	静岡：文殊堂 8 号墳第 1 埋葬施設 [ III ] 静岡：林 2 号墳第 2 埋葬施設 [ IV ]
小円形 (E)	磔詰め (a)		奈良：丹切 6 号墳 [ IV ]
	素掘り (b)	広島：池の内遺跡第 6 号主体 [ IV ? ]	奈良：丹切 6 号墳 [ IV ]

\* 古墳名につづく括弧内は時期を示す。I = 前期末～中期初葉、II = 中期前葉、III = 中期中葉、IV = 中期後葉、V = 後期。

坑と溝状のものについてはひとまず除外してある<sup>2)</sup>。

それらの小土坑は、先行研究でも着目されてきたように、その①平面形態、②構造、③配置にもとづく分類が可能である。ここではその後の知見もふまえながら、それらの基本要素を以下のように分類する。

①平面形態の分類

- A 類：方形を呈するもの（第 1 図 1・2、第 2 図 5）。
- B 類：円形（径 30cm 以上）を呈するもの（第 1 図 3～6、第 2 図 6）。
- C 類：楕円形（長径／短径が 1.5 以上 2.0 未満<sup>3)</sup>）を呈するもの（第 1 図 7、第 2 図 9・10）。
- D 類：長楕円形（長径／短径が 2.0 以上）を呈するもの（第 2 図 1～4）。
- E 類：小円形（径 30cm 未満）を呈するもの（第 2 図 11・12）。

②構造の分類

- a 類：磔を詰めたもの（第 1 図 1・3・4・7、第 2 図 1～4・11）。
- b 類：素掘りのもの（第 1 図 2・5・6、第 2 図 5～12）

③配置の分類

- 1 類：棺床の中央部に配置したもの（第 1 図 1～7、第 2 図 1～3・5・12）。
- 2 類：棺床の端部（小口部）に配置したもの（第 2 図 3・4・6～11）。

つづいて、こうした基本要素の組み合わせによって各事例を分類すると、第2表のように全部で13タイプを確認することができる。これは、三つの基本要素による組み合わせの大半におよぶもので、その意味ではきわめて多様性に富んでいるといえる。したがって、今後あらたなタイプが追加される可能性も否定はできないが、現在の分類状況からは、多くの平面形態に礫詰めと素掘りの二者が存在すること、また、全体として中央部配置が主流であることを認めてよいだろう。こうした細別要素の共有関係や全体としての明確な傾向性は、多くのタイプが相互に関連した存在であることを示している。

## 2. 機能

棺床に設けられた小土坑のうち、内部に礫をとともなうものについては、排水・排湿用とする見解が早くから示されている（北野 1964b : 194 頁、橋崎 1965 : 141 頁）。一方、素掘りのものについても本来は空洞であったと考えられる事例が存在すること<sup>4)</sup>、また、礫を詰めたものと同じ古墳群中に営まれた事例が存在することから<sup>5)</sup>、同様の機能を想定して差し支えないだろう。ただし、ここで問題とする小土坑はいずれも独立的に掘られたもので、付属する溝などはいっさい認められない。したがって、まずは集水の機能を果たすものであり、排水機能という点では下方への自然浸透に任せた施設と考えられよう。

ところで、小土坑に集水の機能を想定するのであれば、基本的に棺床の傾斜（長軸方向）がそれに対応したものでなければならない。そこで、小土坑の配置と棺床の傾斜に着目すると、以下の①～⑧の存在形態を確認することができる。

①中央部配置で両端部から小土坑方向に棺床が傾斜するもの。

東浦2号墳1号棺（第2図1）、仮宿沢渡1号墳SF01（同図2）。

②中央部配置で一方の端部から小土坑方向に棺床が傾斜するもの（反対の端部側は平坦）。

三ツ山2号墳第1主体部（第1図6）、珠金塚古墳南櫛（同図1）、神領2号墳第2主体部（同図4）。

③中央部配置で小土坑から一方の端部方向に棺床が傾斜するもの（反対の端部側は平坦）。

竜門寺15号墳（第1図3）、大渡城山古墳埋葬施設1（同図7）。

④中央部配置で棺床が平坦なもの。

北原古墳北棺（第1図2）、文殊堂8号墳第2埋葬施設（第2図3右）、池の上D-2号墓（同図5）、池の内遺跡第6号主体（同図12）。

⑤端部配置で小土坑方向に棺床が傾斜するもの。

文殊堂8号墳第1埋葬施設（第2図3左）、三ツ山2号墳第2主体部（同図6）、草山遺跡SX182（同図7）。

⑥端部配置で小土坑からもう一方の端部方向に棺床が傾斜するもの。

葛蒲谷2号墳（第2図8）、河田C-21号墳（同図9）、池殿奥5号墳東裾木棺（同図10）。

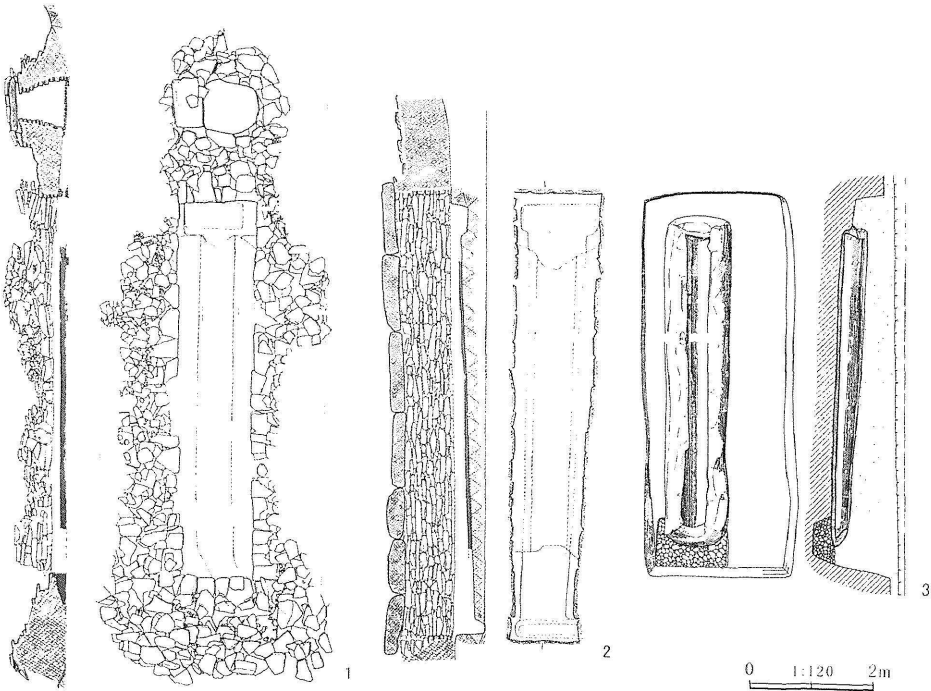
⑦端部配置で棺床が平坦なもの。

林2号墳第2埋葬施設（第2図4）、丹切6号墳（同図11）。

これらのうち、⑥は棺床のもっとも高い側に小土坑が位置しており、集水機能という点ではやや限定的である。それ以外については、棺床の全体もしくは半分程度からの集水機能を果たしうる条件を備えている。そもそも小土坑がどの範囲からの集水を意図したものなのかという問題は未解決であるが、棺床の傾斜という観点からも大半の事例において何らかの集水機能を想定することは可能であろう。

### 3. 系 譜

上記のように小土坑の機能を理解するならば、その系譜については、北野耕平や朴美子が論じたように、古墳時代前期後葉の竪穴式石室や粘土槨に付設された排水用の長方形土坑に求めるのが妥当であろう。そのうち岡山県金蔵山古墳中央石室および南石室の事例は、石室基部の一端に設けられた長方形土坑に溝が接続し、石室外への排水が可能な構造となっている（西谷・鎌木 1959：第3図1・2）。それに対して、大阪府駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土槨（北野 1964a：第3図3）では、基部の一端に礫を充填した長方形土坑（幅130cm、長さ83cm、深さ36cm）のみが設けられている。ただし、この長方形土坑は明確に傾斜する基部の低位側に位置しており、礫を充填した構造からもその排水機能を疑う余地はない。



第3図 排水用土坑をともなう前期古墳の埋葬施設  
 1：岡山・金蔵山古墳中央石室 2：岡山・金蔵山古墳南石室 3：大阪・駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土槨



おそらくは、こうした駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土槨（割竹形木棺）のような事例が直接の祖型となり、その簡略形態として排水用の小土坑が成立したのであろう<sup>6)</sup>。この点は、小土坑をともなう埋葬施設のほとんどが割竹形木棺を採用しているという棺形態の共通性からも裏付けられる（後述）。ただし、依然として問題となるのは、なぜ本来は端部に設けられていた排水用の土坑が中央部に設けられるようになったのかという点である。これまでこの問題に対する明確な解釈は示されていないが、ここでは一つの見方として埋葬遺体数との関係に注目しておきたい。

今回集成した事例の中で埋葬遺体そのものが確認されているのは、長さ1.85 mの箱形石棺から1体分の人骨が検出された奈良県丹切6号墳例のみである。ただし、その収容スペースと副葬品の配置から埋葬遺体数を想定しうる事例も存在する。たとえば、奈良県北原古墳北棺や大阪府珠金塚古墳南槨では直列配置をとる2体分の埋葬が想定されており（楠元・朴編1986、末永編1991）、そうした事例は可能性があるものを含めて7例におよんでいる（第1表）。これらの同棺複数埋葬例は基本的に2体埋葬とみられるもので<sup>7)</sup>、いずれも長さ5 m前後の木棺を採用している。また、静岡県文殊堂8号墳第1埋葬施設以外の6例は、棺床の中央部に小土坑を配置している。一方、副葬品配置から1体埋葬とみられる事例は3例で、それらは棺の長さが相対的に短く、三重県草山遺跡SX182で最長3.53 mを測るほかはいずれも1.8 m前後である。また、丹切6号墳例を含めた4例とも棺床の端部に小土坑を配置している。

このように埋葬遺体数に着目すると、同棺複数（2体）埋葬が想定される事例では長い棺に中央部配置の小土坑がともない、1体埋葬が想定される事例では短い棺に端部配置の小土坑がともなうという対応関係が浮かび上がってくる。そこで、棺の長さ小土坑の配置について埋葬遺体数が定かではない事例を含めて整理すると、中央部配置の事例では21例中7例が長さ4.1～4.9 m、11例が5.0～6.7 mの棺を採用しているのに対し、端部配置の事例では9例中3例が長さ1.8 m前後、5例が4 m前後の棺を採用していることがわかる。すなわち、わずかな例外は存在するものの、棺の長さ小土坑の配置には資料の全体をつうじて一定の対応関係を認めることができる。

以上の整理によれば、中央部配置の小土坑と同棺複数（2体）埋葬の間には何らかの関連があるものと予想される。もちろん同棺複数埋葬が想定される事例は他にも知られており、それらのすべてに中央部配置の小土坑が認められるわけではないので、両者の関係を一般化することはできない。また、中央部配置の小土坑をともなう長い棺がすべて同棺複数埋葬であったという保証もない。とはいえ、上記の事実関係に即してみる限り、同棺複数埋葬という特殊な埋葬行為の実施に関連して、本来は端部に配置されていた小土坑が中央部に配置されるようになった可能性を考えてみる必要はあろう<sup>8)</sup>。

#### 4. 変遷

先にも述べたとおり、棺床に設けられた小土坑は、古墳時代前期の堅穴式石室や粘土槨に付

設された排水用の長方形土坑を祖型としながら、その簡略形態として成立したものと考えられる。したがって、その変遷についてまず考えられるのは、前期段階の長方形・礫詰めタイプの基点とした流れである。その系譜に連なる初期の例としては、方形・礫詰めの小土坑を棺床の中央部に配置していたとされる、前期末～中期初頭の静岡県釣瓶落14号墳1号棺例を挙げることができる。一方、ほぼ同時期に位置づけられる静岡県釣瓶落1号墳例（第1図5）や愛知県三ツ山2号墳第1主体部例（同図6）では、円形・素掘りの小土坑を棺床の中央部に設けている。これらのことから、平面形態や構造、配置の変化は、前期末～中期初頭には生じていたとみることができる。あるいは、岡山県金蔵山古墳南石室（第3図2）で検出された長方形土坑が礫を使用していない点を重視するならば、方形・素掘りの小土坑は当初の段階から存在していて、その変化の中で円形・素掘りの小土坑が生じた可能性も考えられる<sup>9)</sup>。

いずれにしても、前期末～中期初頭には、方形のものと円形のものと、礫詰めのもとと素掘りのものという基本要素が出揃い、中央部への配置もおこなわれるようになったと考えられる。それらの基本要素からなる基本タイプ（方形または円形+礫詰めまたは素掘り+中央部配置）は中期前葉にもっとも多く認められ、中期中葉にも存続していくが、いまのところ中期後葉以降の事例を確認することはできない。また、そうした基本タイプから派生するかたちで、中期前葉には長楕円形・礫詰め的小土坑が出現したと考えられる。

長楕円形・礫詰め的小土坑は、楕長軸方向の長径が80～150cmを測るもので、明らかに規模が大きい。これまでのところ、静岡県中部の志太平野とその周辺域で6例が確認されているのみである。その時期についてみると、志太平野（駿河東部）に位置する中期前葉の東浦2号墳1号棺（第2図1）や同3号墳1号棺、仮宿沢渡1号墳SF01（同図2）が古く、遠江中部に位置する中期中葉の文殊堂8号墳第1埋葬施設・第2埋葬施設（同図3）、中期後葉の林2号墳第2埋葬施設（同図4）があたらしい。こうした状況から判断すると、長楕円形・礫詰め的小土坑は、志太平野に導入された礫詰め的小土坑が同地域の中で独自の変化を遂げ、その後周辺域で命脈を保っていったものと考えられよう<sup>10)</sup>。

以上のように、棺床の小土坑は前期末～中期初頭に基本タイプが成立し、一部の地域で独自の変化を遂げながらも、その中心的な時期は前期末から中期前葉にあったとみることができる。また、そうした基本タイプは中期中葉まで存続するが、中期後葉以降の事例は認められない。すなわち、棺床の小土坑は中期後葉以降には衰退、消滅していくとみられるのであるが、わずかに類例が知られている小円形の小土坑はその退化形態を示すものと考えられる。

小円形の小土坑は直径20cm前後の小規模なもので、奈良県丹切6号墳例（第2図11）、広島県池の内遺跡第6号主体例（同図12）を挙げることができる。それらのうち、丹切6号墳例は箱形石棺の棺床両端に小土坑を設けたもので、一方の小土坑には礫を充填している。池の内遺跡第6号主体例には礫の使用が認められず、前期末以来の小土坑と同一視することには不安もあるが、丹切6号墳例における礫使用の事実から、小円形のものも排水を目的とした小土坑の系譜に連なるものと理解しておきたい。その時期は、丹切6号墳例が中期後葉に位置づけら

れ、確証を欠く池の内遺跡第6号主体例も古墳群の形成時期から中期後半頃とみられる。これらの点から、小円形の小土坑は形態的かつ機能的に退化した後出的な存在と考えることができる。

## 5. 分布

小土坑をともなう埋葬施設は、北部九州から関東西部におよぶひろい範囲に認められる（第4図）。その東端に位置するのは神奈川県吾妻坂古墳第3号主体部例、西端に位置するのは福岡県神領2号墳第2主体部例（第1図4）である。ただし全体としてみると、今回確認した32例のうち、中国地方および九州地方に位置するものは3例のみで、その他は近畿地方以東に分布している。また、もっとも事例数が多い前期末から中期前葉までの事例についてみると、北部九州（福岡県）、近畿東部（奈良県）、東海西部（三重県、愛知県、岐阜県）、東海東部（静岡県）、北陸西部（福井県）、関東西部（神奈川県）に点在していることがわかる。

こうした分布状況の中でとくに注目されるのは、限定された地域やそれらを結ぶルート沿いに分布する傾向が認められる点である。近畿東部では奈良県口宇陀盆地にまとまった分布域があり、これに隣接する三重県域の事例を加えるならば、口宇陀盆地から伊勢湾岸にいたるルート沿いの分布を把握することができる。また、事例数こそ少ないものの、濃尾平野にも分布のまとまりが認められ、峠越えのルートを通じてかかわりが深い福井県勝山盆地の事例もそれと無縁ではない可能性がある。さらに、太平洋岸の静岡県志太平野には12例が集中し、最大の



第4図 棺床に小土坑をともなう埋葬施設の分布 \*番号は第1表に対応

分布域を形成している。関東西部の事例は、その延長線上に位置づけられる可能性があろう。

以上のように、小土坑をともなう埋葬施設の分布は、明らかな偏在性を示している。とくに近畿東部に位置する口宇陀盆地から伊勢湾岸を經由して志太平野、関東西部にいたるルート、また、伊勢湾岸から北上して濃尾平野、勝山盆地にいたるルートにそれらが点在していることは、特定のルートをつうじた限定的な波及をうかがわせるものである。

## 6. 他の墳墓要素との関係

小土坑をともなう埋葬施設は、古墳時代の埋葬施設の中ではきわめて限定的な存在である。しかし、これまでの検討結果をふまえるならば、個々の事例を孤立した単発的な存在とみなすことはできない。ここではその点を検証するために、他の墳墓要素との関係についても確認しておきたい。

まず埋葬施設の構造についてみると、90%以上は木棺直葬（一部粘土槨）で、その大多数は割竹形木棺を採用したものとみられる（第1表）。一方、箱形木棺を採用したとみられる事例は、奈良県池殿奥5号墳東裾木棺例（第2図10）と広島県池の内遺跡第6号主体例（同図12）の2例のみである。また、木棺直葬および粘土槨以外の埋葬施設は、奈良県丹切6号墳の箱形石棺（同図11）と福岡県池の上D-2号墓の土槨（同図5）を認めるにすぎない。さらにいえば、割竹形木棺を採用していないこれらの事例は、中期後葉に時期が下るものか朝鮮半島系の被葬者が想定されるものであり<sup>11)</sup>、それらを除く前期末から中期中葉にかけての事例で棺形態を推定しうるものはすべて割竹形木棺である。こうした事実は、小土坑の祖型とみられる長方形土坑が割竹形木棺を採用した前期の埋葬施設に付設されている点から判断して、割竹形木棺との本来的な関係がその後も強く意識されていたことを示すものと考えられよう。

次に古墳の形態と規模についてみると、小土坑をともなう埋葬施設が営まれた古墳は、基本的に円墳と方墳に限られている（第1表）。唯一の例外は奈良県池殿奥5号墳東裾木棺例であるが、同例は小規模な前方後円墳（墳丘長22.5m）の墳裾部に営まれた埋葬施設である<sup>12)</sup>。また、墳丘規模は10mから20m程度（直径または一辺）のものがほとんどで、それを確実に上回るものは3例しか認められない。それらのうち、大阪府珠金塚古墳は一辺27mの方墳、福岡県神領2号墳は直径26mの円墳であり、他に比べてとくに大きな規模をもつものではない。神奈川県吾妻坂古墳は直径約50mの大型円墳で、唯一突出した規模をもつが、礎詰めの小土坑をともなう埋葬施設（第3号主体部）が中心的な埋葬施設であったのか否かについては有力な判断材料を欠いている<sup>13)</sup>。その点に検討の余地を残すものの、古墳の形態と規模が示す全般的な傾向は、小土坑をともなう埋葬施設が基本的には小型古墳において採用されたものであったことを示している<sup>14)</sup>。

このように小土坑以外の墳墓要素にも着目すると、小土坑をともなう特異な埋葬施設に葬られたのは、割竹形木棺の採用を順守するという点でも一定の意識を共有する小型古墳クラスの被葬者であったことが指摘できる。とすれば、そうした階層的性格を同じくする被葬者たちが、

古墳時代前期末から中期前葉という限られた時期に特定の墳墓要素を共有するにいたった背景とその意味が問われなければならない。

#### IV. 前半期小型古墳の性格

##### 1. 小型古墳被葬者間の交流

これまでの検討結果によれば、棺床に設けられた小土坑は、古墳時代前期の竪穴式石室や粘土槨にみられる排水用の長方形土坑を祖型とし、そこから転じた簡略形態として前期末～中期初頭にいくつかの基本タイプが成立したものと考えられる。また、それらの基本タイプは前期末から中期前葉にかけてもっとも多く認められ、中期前葉には特定地域で独自の変化を遂げたものも出現するが、中期後葉にはほぼ衰退に向かったものと考えられる。その分布は、北部九州から関東西部までの広範囲におよぶが、近畿以東への偏在性は明らかで、限られた地域とそれらを結ぶルート上に点在する傾向が認められる。さらに他の墳墓要素についてみると、割竹形木棺を直葬したものがほとんどで、その大多数は墳丘規模 20 m 以下の小型古墳である。

以上の検討結果は、棺床に小土坑をともなう特異な埋葬施設が、前期末から中期前葉という限られた時期を中心に、階層的な性格を同じくする小型古墳の被葬者によってひろく共有されていたことを示すものである。小土坑自体は単純な構造物であるが、種々ある墳墓要素の中では埋葬施設にかかわる限定的な存在であり、場合によっては同棺複数埋葬という特殊な葬法にかかわっていた可能性がある。とすれば、この特異な墳墓要素の共有は、小型古墳被葬者間の直接的な交流によって生じたものとみるのが妥当であろう。もとより葬制としての一般的な伝播を想定する見方もあろうが、先述の分布状況は面的かつ連鎖的な交流のひろがりを見せず、特定のルートをつうじた拠点的かつ飛び石的な交流のあり方をうかがわせるものである。

ところで、小土坑をともなう埋葬施設が小型古墳被葬者間の交流によって各地に波及したとするならば、そうした動きの原動力となった主体は何処に求められるのであろうか。この問題については、小土坑をともなう埋葬施設のほとんどが割竹形木棺を採用しているとみられる点に重要な手がかりを求めることができる。

近年、古墳時代の木棺については、岡林孝作が用材利用や用材選択の視点を加味した体系的な整理を進め、割竹形木棺についても構造分類を前提にした形態分類をおこなっている（岡林 2005・2010 など）。しかし、ここで対象とする埋葬施設の中には棺体そのものが遺存していた例はなく、小口部の痕跡なども明らかではないため、そうした成果に対応した割竹形木棺の分類は果たせない。とはいえ、割竹形木棺は近畿中央部とその周辺における用材利用の変化の中で主流の位置を確立し、前期後葉以降にひろく採用されるようになったという岡林の指摘は、あらたな視点から割竹形木棺の成立過程を描き出したものとして重要であろう（岡林 2010：321 頁）。その点をふまえるならば、割竹形木棺との強いセット関係からみて、小土坑をともなう埋葬施設は近畿地方において成立した可能性が高いと考えられよう。

この問題を考えるもう一つの重要な手がかりは、古市古墳群に属する大阪府珠金塚古墳に小土坑をともなう埋葬施設（南槨）が認められる点である。同埋葬施設は、三角板鋸留短甲などの出土遺物から中期中葉の年代が与えられ、小土坑をともなう埋葬施設の中ではむしろ後出的な存在である。しかし、当時の王権中枢にかかわる古墳群に属していること、また小土坑をともなう埋葬施設の中で唯一粘土槨を採用していること、さらに方形・礫詰めタイプにおいて最大の規模を有すること、の3点には注意が必要である。すでに述べたように、大阪府駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土槨に付設された礫詰め長方形土坑は、これまで検討してきた小土坑の直接的な祖型とみられる事例である。また、同古墳は古市古墳群に先行して営まれた玉手山古墳群の一角に位置している。珠金塚古墳と駒ヶ谷宮山古墳の年代にはやや開きがあるが、これらの状況を勘案すると、かつて北野耕平が指摘した駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土槨から珠金塚古墳南槨への排水用土坑の変化は、この一帯における連続的な変化として理解しうる可能性がある（北野1964b：194頁）。もちろん両者の年代差を埋める資料の発見が望ましいが、かりに以上のような見方に立つならば、小土坑をともなう埋葬施設に関する情報は、当時の王権中枢に連なる集団に端を発するものであったとの想定も成り立つ<sup>15)</sup>。

以上、やや推論をまじえて述べた点をまとめると、小土坑をともなう埋葬施設が示す小型古墳被葬者間の交流は、近畿地方を基点とする動きとしてとらえられ、見方によっては王権中枢にかかわる集団が関与していた可能性さえ考えられる。それは、早くも古墳時代前期末から中期前葉にかけての時期に、一部の小型古墳被葬者が近畿地方の政治勢力、すなわちヤマト王権との間に何らかの関係を築いていたことを示すものであろう。

## 2. 小型古墳出現の背景

上記のように、古墳時代前期末から中期前葉にかけて、一部の小型古墳被葬者がヤマト王権との関係をいち早く築いていたとするならば、当該被葬者らはそれぞれが存立の基盤とする地域社会の中ではどのような立場を保持していたのであろうか。

従来この点に関しては、古墳時代前・中期にヤマト王権（またはヤマト政権）との間で直接の政治的関係を築いたのは各地の大型古墳（前方後円墳）に葬られた有力首長層であり、その在地支配に組み込まれた小型古墳の被葬者にまでヤマト王権の直接的な支配はおよんでいないとする見方がある（和田1992・1998など）。とくに古墳時代中期には、大型前方後円墳のもとに中・小の古墳や小型の墳墓がつらなる古墳の階層構成が顕在化し、各地の大首長による強固な在地支配が進行したものと考えられている<sup>16)</sup>。

しかし、小土坑をともなう埋葬施設を採用した小型古墳の存在形態を検討すると、同時期の大型古墳が周辺に存在しないか、もしくは大型古墳との関係が希薄であるという実態が浮かび上がってくる。たとえば、静岡県志太平野には古墳時代前・中期の大型古墳（前方後方墳、前方後円墳など）は存在せず、やや規模の大きい古墳（五州岳古墳：円墳・25 m、岩田山31号墳：円墳・45 m）が築かれるようになるのは中期前葉の終わり頃から中期中葉にかけての時期で

ある（滝沢 2003）。つまり、小土坑をともなう埋葬施設が積極的に採用された前期末から中期前葉にかけての時期には、地域全体を支配するような有力首長の存在を想定することはできないのである。

こうした状況は、奈良県口宇陀盆地においても指摘することができる。口宇陀盆地では、前期後半から中期初頭にかけて2基の前方後方墳（鴨池古墳：47 m、北原西古墳：31 m）が築かれるが、その後前方後円墳が築かれるようになるのは中期後半以降のことである（楠元 1986）。ここでも、小土坑をともなう埋葬施設（北原古墳北棺）が採用された中期前葉に顕著な大型古墳の存在を認めることができない。また、岐阜県竜門寺15号墳の場合には、同一古墳群中に豊富な副葬品を出土した竜門寺1号墳（円墳・17 m）が存在するものの、周辺に同時期の大型古墳が造営されていない点に変わりはない。このほか、福井県大渡城山古墳や福岡県神領2号墳についても、ほぼ同様の存在形態を指摘することができる。

以上のように、前期末から中期前葉に小土坑をともなう埋葬施設を採用した古墳は、大型古墳の造営地域とは異なる地域に営まれているケースが多い。この点を重視するならば、いち早くヤマト王権との関係を築いた小型古墳の被葬者たちは、地域首長による在地支配がまだ確立されていない地域の人々であったと考えることができる。もちろん古墳時代中期には複数の地域を統合した大首長の存在が想定されることから、それらの小型古墳被葬者が広域支配の一部に組み込まれていたとする見方もあろう。ただしそのような見方に立った場合でも、ヤマト王権が小型古墳被葬者との間に関係を築こうとしたのは、大首長が拠点とする地域からは離れた周辺の地域であったと理解することができる。

こうしてみると、古墳時代前期末から中期前葉にかけて小土坑をともなう埋葬施設がひろがりをみせた背景には、一部の地域の小型古墳被葬者を直接その支配秩序に組み込もうとするヤマト王権側の動きがあったものと推察される。それは、地域首長による在地支配が確立されていない地域、もしくはその支配が十分におよばない地域にねらいを定めたものであった可能性が考えられる<sup>17)</sup>。

ところで、小土坑をともなう埋葬施設を採用した古墳は、そのほとんどが相前後する時期の小型古墳とともに古墳群を形成している。そうした簡略な竪穴系埋葬施設を採用する小型古墳のまとまりについては、かつて石部正志が古式群集墳と命名し、弥生時代の方形墓群と古墳時代後期の群集墳をつなぐ存在として造営主体の階層的連続性を重視する見解を示したことは周知のとおりである（石部 1975・1980）。それに対して白石太一郎は、初期群集墳の名称を用いながら、その出現の契機をあくまでも「ヤマト政権」による支配秩序の拡大と関連づけて説明した（白石 1976・1981）。また、和田晴吾は、「古墳時代後期前半（本稿の中期後葉）」以降に出現する群集墳を、古式群集墳、新式群集墳、終末式群集墳の三者に分類し、それぞれの歴史的性格を体系的に論じた（和田 1992）。

これらのほかにも、古式群集墳や初期群集墳をめぐる議論は数多く存在する。ここでそれらを詳しく検討する余裕はないが、総じてみれば、本格的な古式群集墳の成立を中期中葉以降に

認め、その成立要因をヤマト王権による支配秩序の拡大と関連づけて説く意見が大勢を占めているといえよう。その一方で、前期末から中期前葉にかけての小型古墳については、奈良県磐余・池ノ内古墳群（泉森・菅谷 1973）や静岡県若王子古墳群が古式群集墳の先駆的存在として注目されてきたものの（石部 1980、楠元 1986、松井 1994、村田 2002）、それほど活発な議論がおこなわれてきたわけではない<sup>18)</sup>。むしろ当該期については、弥生時代墓制の流れをくむ方形区画墓あるいは小形低方墳の評価に多くの関心が払われてきたという経緯がある（寺沢 1986、楠元 1992、和田 1992、京嶋 1997 など）。

いまこれらの議論をふまえたとき、本稿で検討してきた内容は古式群集墳の成立をめぐる問題にも一石を投じるものとなろう。先にも述べたように、前期末から中期前葉にかけての小土坑をとともう埋葬施設のひろがり、小型古墳被葬者と直接の関係を取り結ぼうとしたヤマト王権側の動きを反映したものと考えられる。その対象はなお一部の地域にとどまっているが、近畿以東を中心として広域におよんでいる点は看過することができない。しかも、地域首長による在地支配が確立されていない地域または十分ではない地域を意図的に選択している可能性がある。こうした理解に大きな誤りがなければ、地方の小型古墳被葬者を直接その支配秩序に組み込もうとするヤマト王権側の動きは、少なくとも古墳時代前期末から中期前葉には部分的に始動していたとみななければならない。この段階における小型古墳被葬者の社会構造上の位置づけについては議論の余地があるが<sup>19)</sup>、中期中葉以降の本格的な古式群集墳に先行する存在として、前期末～中期前葉の小型古墳をひろく再検討する必要があることは確かであろう。

## V. おわりに

本稿では、棺床に小土坑をとともう特異な埋葬施設の検討をつうじて古墳時代前半期における小型古墳の性格について若干の考察を試みた。小さな穴をとおして得られた小論の知見はきわめて限られているが、その成果はおおよそ次の3点にまとめられよう。

第一は、棺床に設けられた小土坑をあらためて分類、検討し、その機能や系譜、変遷についての基本的理解を深めることができた点である。各要素の組み合わせからなる小土坑のタイプにはある程度の多様性が認められるものの、それらは相互に関連した存在であり、古墳時代前期末から中期前葉にその中心的な時期を求めることができる。

第二は、小土坑をとともう埋葬施設の分布と被葬者の階層的位罫にかかわる認識をあらたにすることができた点である。小土坑をとともう埋葬施設の分布は、列島の広範囲におよぶものの、近畿以東に偏在する明らかな傾向を示している。また、採用例の大多数は墳丘規模 20 m 以下の小型古墳であり、被葬者の階層的位罫はほぼ限定されている。

第三は、小土坑をとともう埋葬施設のひろがりを小型古墳被葬者間の直接的な交流によるものと理解した点である。そうした交流の背景には、古墳時代前期末から中期前葉に、一部地域の小型古墳被葬者を直接その支配秩序に組み込もうとするヤマト王権の動きがあったものと推察される。このことは、本格的な古式群集墳に先行する時期の小型古墳について再評価を促す



ものである。

本稿で取り上げた墳墓要素以外にも、古墳時代前半期の小型古墳には地域を越えた結びつきを示す要素が認められる。今回は遺構をめぐる議論に終始したが、遺物論（とくに副葬品論）の深化が欠かせないことはいうまでもない。そうした広域におよぶ墳墓要素の検討は、古墳時代前半期における小型古墳の歴史的な性格を追究していくうえで重要な視座を与えるものとなる。もちろん地域に視点を定めた研究も重要であり、地域首長を頂点とした階層構造や特定地域の伝統的要素に関する議論は不可欠である。ただしそれのみでは、前半期小型古墳の歴史的な性格を十分に咀嚼できないおそれがある。ここではその研究の方向性として、これまで以上に水平方向に視野をひろげた検討が必要であることを指摘しておきたい。

## 謝 辞

本稿は、平成22年度～平成24年度科学研究費補助金「古墳時代前期における小型古墳の展開と政治秩序の形成に関する研究」（基盤研究C 研究代表者：滝沢 誠 課題番号：22520763）によって得られた研究成果の一部である。本稿にかかわる資料調査ならびに本稿の作成にあたっては、下記の諸氏、諸機関にご協力をいただいた。末筆ではあるが、記して感謝の意を表したい。

浅田朋子、磯部武男、岩木智絵、岡林孝作、小野友記子、恩田知美、澤田典子、坪井裕司、早瀬 賢、吉田晋右、岐阜市歴史博物館、小牧市教育委員会、藤枝市立郷土博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（敬称略）

## 註

- 1) 本稿では、各地域において整理されている古墳の規模構成（田中2000、寺前2001など）をふまえながら、墳丘規模20m以下のものを小型古墳と呼ぶ。
- 2) 朴の集成に挙げられている奈良県忍坂4号墳第1次埋葬施設例についても今回は除外した。同例は、小土坑の周囲に一回り大きな土坑をとまなう二段土坑であり、位置づけが難しい資料である。なお、調査報告書では、この土坑（柱穴）を第2次埋葬施設の設置に先立つ儀礼用の立柱にかかわるものと解釈している（前園1978：195-196頁）。このほか、棺床の端部で検出された落ち込みのうち、棺小口板の痕跡とみられるものは資料に加えなかったが、一方の端部にのみ認められ、その形状からも小土坑の可能性が考えられるもの（愛知県三ツ山2号墳第2主体部）は資料に追加した。
- 3) C類およびD類は、棺長軸方向に長径をもつものとする。棺短軸方向に長径をもつものは、繁雑さを避けるためにひとまずB類（円形）に含めておく。
- 4) 奈良県北原古墳北棺では、本来棺底に置かれていたとみられる鉄製品と玉類が小土坑の埋土中に落ち込んだ状態で出土しており、当初の小土坑内部は空洞であったと考えられている（楠元・朴編1986：25頁）。
- 5) 静岡県釣瓶落古墳群、同東浦古墳群には、礫詰めのもと素掘りのものがともに存在する。
- 6) 朝鮮半島南部では、5世紀に位置づけられる釜山堂甘洞古墳群や同福泉洞古墳群の竪穴式石槨墓などで小口部に設けられた小土坑が確認されている。しかし、その内部からは土器などの遺物が出土して

おり、ここで取り上げる日本列島の事例とは性格を異にする副葬品埋納坑と考えられる。また、中国の殷周～戦国時代墓において盛行した腰孔（犠牲獣埋納用土坑）の存在も念頭に浮かぶが、年代的にも機能的にも関連性は認められない。日本列島では、弥生時代前期～中期前半の北部九州において木棺墓の床に小土坑を設けた事例が知られている。ただし、内部に頭蓋骨のみを納めた事例（福岡県新町遺跡 24 号墓例）が存在することから、戦闘行為にともなう特殊な性格が想定されている（橋口 1995：55-57 頁）。年代的な開きも大きく、これも今回取り上げる小土坑とは無縁の存在であろう。

- 7) 福岡県神領 2 号墳第 2 主体部では、副葬品配置から 3 体の直列埋葬が想定されている（平之内・石山 1984：12-13 頁）。しかし、各遺体の身長が前後の遺体との位置関係により 1.1～1.5 m と推定されていることには、やや無理があるように思われる。ここでは、竪櫛や玉類の出土位置を手がかりに 2 体の埋葬を想定しておくことにしたい。その場合、鏡は類例の乏しい足部への副葬事例となるが、鏡の周辺から左右に分かれて出土した玉類は、むしろ足玉としての理解が可能となる。
- 8) 問題となるのは、同棺複数埋葬に関連してなぜ小土坑を中央部に配置する必要が生じたのかという点である。単純に考えれば、1 体埋葬では端部に配置していた小土坑を、2 体埋葬に際してその中間に配置したということであろう。しかし、基本的に追葬不可能な構造をもつ竪穴系埋葬施設における同棺複数埋葬の場合、同時死亡同時埋葬または異時死亡同時埋葬という特殊な埋葬行為が想定されることから、その葬送過程における役割の有無については慎重な判断が必要である。とくに後者の場合は、初葬者の遺体を一定期間保管するモガリとの関連が問題となるからである（沼澤 1977）。
- 9) 朴美子は、方形（長方形を含む）・礫詰めタイプの基点とし、そこから方形・素掘りのタイプへ変化すると、円形・礫詰めタイプのタイプに変化したのち円形・素掘りのタイプに移行する流れを想定している（朴 1986：99 頁）。
- 10) 志太平野には棺床に小土坑をとまなう埋葬施設の事例が数多く認められ、前期末に遡る事例も存在する。しかし、それらは外部地域から導入された割竹形木棺や土器の副葬と密接に結びついていることから、小土坑そのものが志太平野で発生したとする見方は成立しがたい（滝沢 2003：38 頁）。
- 11) 池の上 D-2 号墓を含む池の上・古寺墳墓群では、北部九州の中でも他に先駆けて埋葬施設内への土器副葬が認められること、また、土器には伽倻系の陶質土器を多く含むことから、その被葬者は朝鮮半島からの渡来人であった可能性が指摘されている（土生田 1985）。今回の分類では、池の上 D-2 号墓例の平面形態をひとまず方形に含めたが、厳密にいうと土壙の長軸方向に長い縦長長方形である。方形の事例が少ないため十分な比較はできないが、ここで取り扱う小土坑が前期にみられる横長長方形の土坑に端を発するとの基本的理解に立つならば、まったく別系譜の存在として位置づけるべきものなのかもしれない。
- 12) 小土坑をとまなう埋葬施設には、他の埋葬施設とともに墳頂部に併設されたものが数多く存在する。そのほとんどは最初に営まれた中心的な埋葬施設、もしくはそれに準じた規模をもつ埋葬施設である。
- 13) 当初の報告書では、礫詰め小土坑をとまなう第 3 号主体部が吾妻坂古墳において最初に設けられた埋葬施設であり、その後それと主軸方向を異にするかたちで第 1 号主体部および第 2 号主体部が設けられたと理解している（日野・北川ほか 1993：132 頁）。しかし、後に刊行された資料調査報告書では、重なり合う第 3 号主体部と第 1 号主体部の重複関係を証明する手がかりがないことから、両者の先後関係についての結論を保留している（西川ほか 2004：67 頁）。
- 14) 今回は詳細な検討をおこなわなかったが、副葬品については、墳丘規模に応じて全般的に貧弱なものが多い傾向にある。また、特定品目に偏る目立った傾向は認められない。
- 15) 朴美子も駒ヶ谷宮山古墳、珠金塚古墳の存在にふれながら、「排水坑」をもつ埋葬施設は「大王に服

属する下のクラスである武装集団の長や、一地方の有力豪族の類縁に採用された」との見解を示している（朴 1986：100 頁）。

- 16) 和田晴吾は、中期に主要な前方後円墳が築かれず、帆立貝形古墳や円墳が首長墳として築かれた地域には、「ヤマト政権」による支配がより直接的におよんだとも指摘している（和田 1992：328 頁）。ただし、前期および中期（本稿の中期前葉～中葉）の小型古墳については、在地的な墓制としての「小型低方墳」という評価にとどまっている。
- 17) 寺前直人は、大阪府豊島地域における事例分析をつうじて、中期中葉における盟主墳の縮小化と小方墳の増加が連動した動きであることを指摘し、その背景に「倭王権の新たな「支配」方式」の展開を想定している。時期はやや異なるが、大型古墳と小型古墳の存在形態を排反的にとらえる視点は注目されよう（寺前 2001）。
- 18) 群集墳概念の提唱者である近藤義郎は、磐余・池ノ内古墳群を構成するような小型古墳の被葬者について、首長の職務を分担した首長一族の有力成員や氏族の長、あるいはそれに準じた有力成員であると述べている（近藤 1983：256 頁）。
- 19) 前期末から中期中葉にかけての小型古墳が集中的に営まれている静岡県若王子古墳群および釣瓶落古墳群では、教基からなる単位の中で小型古墳が時期を異にして築かれている状況もうかがえる（八木 2010）。古墳ごとの埋葬施設数は限定されており、家族墓としての位置づけは困難であるが、集団内有力成員による複数系列の累代的な古墳築造を示すものとして注目される。

#### 参考文献

- 石部正志 1975 「古墳文化論－群集小古墳の展開を中心に－」『日本史を学ぶ 1 原始・古代』有斐閣 46-62 頁。
- 1980 「群集墳の出現と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座 4 朝鮮三国と倭国』学生社 370-402 頁。
- 泉森 俊・菅谷文則 1973 『磐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 28 冊 奈良県教育委員会。
- 岡林孝作 2005 「古墳時代「棺制」の成立」『季刊考古学』第 90 号 雄山閣 29-32 頁。
- 2010 「木棺」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会 311-326 頁。
- 北野耕平 1964a 「駒ヶ谷宮山古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第 1 冊 大阪大学文学部国史研究室 84-118 頁。
- 1964b 「前期古墳における内部構造の問題」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第 1 冊 大阪大学文学部国史研究室 186-196 頁。
- 京嶋 覚 1997 「初期群集墳の形成過程－河内長原古墳群の被葬者像をもとめて」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会 213-226 頁。
- 楠元哲夫 1986 「宇陀、その古墳時代前半期における二・三の問題」『宇陀北原古墳』大宇陀町役場 102-132 頁。
- 1992 「野山方形区画墓群・古墳群の形成過程とその構造－とくに古式群集墳の理解によせて－」『野山遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 59 冊 奈良県教育委員会 188-220 頁。
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』岩波書店。
- 白石太一郎 1976 「石光山古墳群の提起する問題」『葛城石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査

- 報告第31冊 奈良県教育委員会 457-464頁.
- 白石太一郎 1981 「群集墳の諸問題」『歴史公論』第7巻第2号 雄山閣 79-86頁.
- 末永雅雄編 1991 『盾塚・鞍塚・珠金塚』由良大和古代文化研究協会.
- 滝沢 誠 2003 「志太平野における古墳時代前・中期の小型墳」『焼津市史研究』第4号 焼津市 21-46頁.
- 田中 裕 2000 「編年的研究にみる前期古墳の展開」『千葉県文化財センター研究紀要』21 千葉県文化財センター 339-374頁.
- 寺沢 薫 1986 「方形区画墓群の変遷と構造」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会 315-326頁.
- 寺前直入 2001 「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式－豊島地域における小古墳の検討を通じて－」『待兼山遺跡Ⅲ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会 62-73頁.
- 橋崎彰一 1965 「岐阜市長良竜門寺古墳群」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』38 名古屋大学文学部 127-156頁.
- 前園実知雄 1978 「忍坂第4号墳」『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第34冊 奈良県教育委員会 181-197頁.
- 西川修一ほか 2004 『吾妻坂古墳出土資料調査報告』厚木市教育委員会.
- 西谷眞治・鎌木義昌 1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館.
- 沼澤 豊 1977 「合葬の問題」『東寺山石神遺跡』日本道路公団東京第一建設局・建設省関東地方建設局・財団法人千葉県文化財センター 139-154頁.
- 橋口達也 1995 「弥生時代の戦い」『考古学研究』第42巻第1号 考古学研究会 54-77頁.
- 土生田純之 1985 「古墳出土の須恵器（一）」『末永雅雄先生米寿記念献呈論文集 乾』末永先生米寿記念会 523-544頁（改稿：土生田純之 1998「古墳出土の須恵器（Ⅰ）－九州における古墳出土の須恵器－」『黄泉国の成立』学生社 40-64頁）.
- 日野一郎・北川吉明ほか 1993 『吾妻坂古墳』厚木市教育委員会.
- 平ノ内幸治・石山 勲 1984 『神領古墳群』宇美町教育委員会.
- 朴 美子 1986 「埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察」『宇陀北原古墳』大宇陀町役場 82-101頁.
- 松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『地域と考古学』向坂綱二先生還暦記念論集 343-386頁.
- 村田 淳 2002 「古式群集墳の成立とその性格－駿河・遠江の事例分析を通じて－」『静岡県考古学研究』34 静岡県考古学会 47-72頁.
- 八木勝行 2010 「初期群集墳と志太平野古墳文化の形成」『藤枝市史 通史編上 原始・古代・中世』藤枝市 121-154頁.
- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本5 近畿Ⅰ』角川書店 325-350頁.
- 1998 「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館 141-166頁.
- 資料文献**（番号は第1表の番号に対応）
- 1・2：日野一郎・北川吉明ほか 1993 『吾妻坂古墳』厚木市教育委員会.  
西川修一ほか 2004 『吾妻坂古墳出土資料調査報告』厚木市教育委員会.
- 3～5：藤枝市教育委員会 1983 『若王子・釣瓶落古墳群』.  
八木勝行 2007 「若王子古墳群」『藤枝市史 資料編1 考古』藤枝市 435-450頁.

- 6～9：藤枝市教育委員会 1983 『若王子・釣瓶落古墳群』  
 八木勝行 2007 「釣瓶落古墳群」『藤枝市史 資料編1 考古』藤枝市 451-460頁。  
 10～13：八木勝行・椿原靖弘 1988 『東浦遺跡発掘調査報告書』藤枝市教育委員会。  
 14：岩木智絵 2005 『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』藤枝市教育委員会。  
 15～17：田村隆太郎編 2008 『森町円田丘陵の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第186集  
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。  
 18・19：荻野繁春 1980 『三ツ山古墳群発掘調査報告』小牧市教育委員会・愛知県土木部。  
 赤塚次郎 2005 「三ツ山古墳群」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県 84-89頁。  
 20：植崎彰一 1965 「岐阜市長良竜門寺古墳群」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』38 名古屋大学文  
 学部 127-156頁。  
 21：工藤俊樹・富山正明編 1992 『大渡西布遺跡・大渡城山古墳』福井県埋蔵文化財調査報告第19集  
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター。  
 22：松阪市教育委員会 1983 『草山遺跡発掘調査月報』No.7。  
 23：多気町教育委員会 1986 『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』。  
 24：朴 美子 1986 「埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察」『宇陀北原古墳』大宇陀町役  
 場 82-101頁。  
 25：菅谷文則編 1975 『宇陀・丹切古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊 奈良県教育委  
 員会。  
 26：楠元哲夫・朴 美子編 1986 『宇陀北原古墳』大宇陀町役場。  
 27：楠元哲夫・松本洋明・井上義光ほか 1988 『野山遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第  
 56冊 奈良県教育委員会。  
 28：井上義光・松本洋明ほか 1989 『野山遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第59冊 奈良  
 県教育委員会。  
 29：末永雅雄編 1991 『盾塚・鞍塚・珠金塚』由良大和古代文化研究協会。  
 30：中村真哉・若島一則 1985 『池の内遺跡発掘調査報告』広島市の文化財第32集 広島市教育委員会。  
 31：平ノ内幸治・石山 勲 1984 『神領古墳群』宇美町教育委員会。  
 32：橋口達也ほか 1979 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集 甘木市教育委員会。

#### 図出典

- 第1図 1：末永編1991 2：楠元・朴編1986 3：植崎1965 4：平ノ内・石山1984 5：藤枝市教育委員  
 会1983 6：荻野1980 7：工藤・富山編1992 (いずれも一部改変)。  
 第2図 1：八木・椿原1988 2：岩木2005 3・4：田村編2008 5：橋口ほか1979 6：荻野1980 7：  
 松阪市教育委員会1983 8：井上・松本ほか1989 9：多気町教育委員会1986 10：楠元・松本・  
 井上ほか1988 11：菅谷編1975 12：広島市教育委員会1985 (いずれも一部改変)。  
 第3図 1・2：西谷・鎌木1959 3：北野1964a (いずれも一部改変)。  
 第4図 筆者作成。

The Nature of Small Tumuli in the First Half of the Kofun Period :  
Considerations on the Graves with a Small Pit under a Coffin

TAKIZAWA, Makoto

In the Early and the Middle Kofun Period, there was a unique type of graves which had a small pit under a coffin. Its origin can be traced back to a drainage pit in the Early Kofun period. The basic type of these graves was established from the end of Early Kofun period to the beginning of the Middle Kofun period, and was then adopted by tumuli in various places. Their distribution shows the tendency of an overconcentration in Kinki district and eastward. Moreover, these graves were found only in small tumuli. This unique type of graves was probably established in Kinki district, and the interaction among the people buried in this type of small tumuli was controlled by the Yamato Polity. Furthermore, we can hardly find any contemporary large tumuli around this type of small ones. It follows from these observations that the Yamato Polity sought for a direct relationship with the people buried in the small tumuli. We can therefore conclude that the people buried in those small tumuli in some areas were already put under the control of the Yamato Polity from the end of Early Kofun period to the beginning of Middle Kofun period.